

## 市民による湯川秀樹生誕 100 年シンポジウムについて

斎藤 吉彦

大阪市立科学館

市民が湯川秀樹に関する研究を行い、その成果を発表する場として、「市民による湯川秀樹生誕 100 年シンポジウム」が開催された。会場設営・予行集作成・進行などシンポジウムの運営は全てを市民が行い、好評を得た。科学の語り部となった市民の感激は大きく、今後の飛躍が期待される。

### 1. はじめに

市民が主体となることを原則として、「湯川秀樹を研究する市民の会」(以降、湯川会)が発足し、「市民による湯川秀樹生誕 100 年シンポジウム」(以降、湯川シンポ)が 2007 年 3 月 4 日に開催された。市民が自ら研究し、その成果を市民に対して発表するものである。参画した市民の達成感は大きく、出版を目指して次の活動が始まっている。また、シンポジウムに参加した市民の満足度も極めて高いものであった。本稿では湯川会の活動、及び湯川シンポについて報告する。

### 2. 活動歴

湯川会の母体となったのは大阪市立科学館友の会の「りろんサークル」である。「りろんサークル」は、1994 年の連続講座「相対論入門」の後に発足した「相対論サークル」が前身である。輪講形式の学習会で、相対論、量子力学、物理数学などをテーマとして 11 時から 16 時ごろまで、十数人前後が毎月集まって熱心に議論をしている。メンバーは主婦、会社員、教員など理系・文系を問わず様々な層で構成されている。年齢層は、20～80 歳代までで、中年以上が大半である。著者は 2007 年の湯川生誕 100 年記念事業を想定し、「りろんサークル」に湯川会の設立を呼びかけ、2005 年 12 月に湯川論文の紹介を著者が行うことで準備会が始まった。翌月の 1 月にメーリングリストを立ち上げ、メールでの議論を可能とした。著者がこの準備会を主宰し湯川論文の学習を続け、4 月に湯川会が正式に発足した。素人である市民を主体とするため、会員の構成は、主体である一般会員(一般市民 34 名)、調査研究に対する助言をするアドバイザー(専門家 2 名)、主に運営面での助言をする顧問(学芸員 3 名)である。毎月定例会を開くこととし、4 月から市民がシンポジウム開催を目標に活動を開始した。

活動は主に定例会で行われた。論文の読破を目指したが、会員にとって難解であった。そこで、まずは和訳に取り組むこととなった。論文以外にも、湯川の一般向き書物の紹介

---

ON a symposium of 100 years anniversary of the birth  
of Hideki Yukawa

Yoshihiko Saito

や、湯川論文誕生時の社会的背景なども調査された。12月までの定例会では、会員各自が、まさか自分がシンポジウムで発表するとは考えていないかのように思われた。しかし、シンポジウムの日が近づき、発表の分担が決まると、急激に市民の活動は活発となり、チラシ・ポスターの制作、キャッチフレーズ「よっしゃ！わかった！？中間子論」の決定、アンケートの作成・解析、予稿集の作成、午前からの開催、ポスターセッションなどが決定された。さらに、プロの講演を依頼することは止め、全てが市民の発表となった。力量をはるかに超えた計画のように思われたが、みごとに完遂された。

### 3. シンポジウム

17人の市民がノーベル賞論文とその社会的背景・科学史的背景、平和運動、阪大創設の背景など、口頭発表と4点のポスター発表を行った。一般書物では見ることのできないものもあった。また、ノーベル賞論文を各章ごとに真正面から詳説した。中間子質量の導出に関しては、一般に知られた方法と湯川の方法が異なることを明らかにした。参加者は発表者を含め66名で、一般参加は17歳か83歳までの平均年齢56歳であった。会場は、熱心にメモを取る光景が多く、居眠りの少ない熱気に満ちた雰囲気であった。科学の語り部となった市民の感激は大きく、今後の出版を目指して活動を始めている。

後援を大阪大学大学院理学研究科物理学専攻、大阪大学核物理研究センター、大阪大学湯川記念室、大阪市立大学大学院理学研究科から、協力を京都大学湯川記念館史料室から得た。このことも市民を勇気付けるものとなった。

### 4. まとめ

「湯川秀樹を研究する市民の会」が発足し、「市民による湯川秀樹生誕100年」シンポジウムが開催された。素人の市民が継続して調査・研究を行い、アドバイザーとして参加した専門家はそれに対して適切な助言を与えた。運営も全て市民が行い、見事にその成果を発表した。プロにはできない素人ならではの発表は聴衆に親近感を与えるものであった。発表内容は一般に知られていないことを含むなど多くの層に興味を持たせるもので、聴衆側の市民の満足度も極めて高く、半数近くが湯川会参加の意思があったほどである。発表者側の市民は、達成感とともに大きな感激を味わったようである。その勢いで出版の準備が始まっている。

プロの講演を受身的に聞くのではなく、発表のために主体的な学習をしたため深い理解が得られた。成果はシンポジウム当日だけでなく、科学の語り部として今後継続的に活躍することが期待される。非常に効果の大きい普及活動である。

ただし、間違った発表もあった。専門家の熱心な指導があったものの、時間切れであった。市民の力量としてはこれ以上を望むのは無理かもしれない。もし、厳格さを追求していたら、シンポジウム間近の盛り上がりはなく、上記のような成果はなかったであろう。市民の士気を高めつつ、いかに正確な情報を発信するかは、今後の課題である。

今回の市民参画型の普及事業を可能としたのは、湯川会の母体となった「りろんサークル」の存在である。10年を越える「りろんサークル」の活動が、新たな展開への欲求を醸成していた。この欲求で集まったメンバーが核となり、多くの市民が参加することで湯川会が発足したのである。市民参画型事業の実施計画を聞くことがあるが、このような下積み活動を考慮することが必要であろう。